

## 「中国帰国生」と社会科教育

坂 口 克 彦\*

### 1. はじめに

国際化の進展に伴い「帰国子女」・「在日外国人生徒」を受け入れる高等学校はここ数年、全国的に急速に増加したが、引揚者の数の最も多い首都東京では「中国残留日本人孤児」の子女である「引揚子女」も全日制普通科・国際科・職業科で別枠募集を開始し、帰国生の幅広い選択を可能にしようとする努力がみられる。

その受け入れ校における社会科教育の実態に関する報告事例は非常に少ない。<sup>1)</sup>

筆者は、中郡利彦・東京都公立学校講師とともに、非常勤講師として「引揚子女」受け入れ校に勤務する場を与えられたのを機会として、「中国からの引揚子女」と「一般生徒」とが一緒に学習しているという場における社会科教育の実践を試みた本稿はその研究ノートである。

なお、東京都では終戦前から引き続き外国に居住していた者で終戦後はじめて永住の目的で帰国した者の子女を「引揚子女」と定めているが、現実には正式ルートで引き揚げてきた者だけではなく、中国からの者だけ特別名称をつけることは不平等にもあたるということで、高等学校現場では「帰国生」という名称を使用しており、本稿でもその表記に従った。

### 2. 受け入れ校におけるカリキュラムの工夫について

#### (1) 定時制課程におけるカリキュラム

これまで、「中国帰国生」をはじめとして、一般の帰国子女や外国籍生徒を早くから受け入れてきたのは定時制課程であった。東京都の場合、既に1970年頃から見られたとされる。<sup>2)</sup>とくに「中国帰国生」や外国籍生徒の場合、経済的問題から一人でも多くの者が働かねばならないという家庭事情を持つ者が多く、その意味で「昼に働く」という夜間定時制課程での「中国帰国生」の受け入れはかなりの数にのぼると考えられる。(残念ながら、その正確な数の発表はない)

筆者も定時制課程において1名の「中国帰国生」を教えたことがあるが、特別なカリキュラムの設定はなされず、一般生徒と一緒にクラスで、すべて日本語での普通の授業を受けさせただけであった。その生徒の場合、昼は日本語学校に通っており、ある程度授業内容を解せるレベルであったが、それでも他生徒との人間関係はなかなか作れなかったようである。

他校定時制課程においても、特別のカリキュラムを組むことは殆どないが、東京都内で一校だけ、著しい語学力の差の打開のため、「帰国生」のみを取り出しての国語と英語での「促進授業」を第1～4学年(年により変わり、レベルに達し次第普通クラスに戻す)を展開した例がある。<sup>3)</sup>

これにより、噂が噂を呼ぶ形で、「中国帰国生」のみならず、ベトナムポートピープルなど、外国籍生徒が多く入学するようになり、1987年度にはついに入学者が10名を超えたため、社会科・現代社会でも授業進行に支障をきたし、第1学年のみでの「促進授業」を開始している。

\* 東京都立農産高等学校

第1学年を例とすると21単位中、11単位が「促進授業」となっている。

## (2) 全日制課程におけるカリキュラム

一方、全日制課程受け入れ校では、帰国生徒に対し第1学年で「7時間目」に、「日本語」の授業が行われる。また、これら帰国生徒それぞれは、置かれていた環境の違いにより、各教科に関して大きな能力の差異があり、英・国・社・数の4教科については第3学年まで（年によって変わる）一般生徒と異なる形態と進度で授業を行う、いわゆる「取り出し授業」を実施している。

そのうち特に英語・国語の2教科では、その著しい能力差の打開のため「取り出しの“取り出し”」の授業までも展開せざるを得ない状況となっている。

つまり、英・国・社・数の各教科では1クラスが同時に2～3つに分かれて授業を受けるという事態が発生しており、筆者の勤務校の第1学年を例にすれば、総単位数33単位中、22単位が「取り出し」となっている。その上、前述の「日本語」4単位があるのである。<sup>4)</sup>

## 3. 「中国帰国生」に対する社会科教育

### (1) 社会科の「取り出し授業」の目的

「中国帰国生」に対しての「取り出し（促進）授業」の第一目的は、もちろん日本社会を理解し、日本社会の中で適応してゆけるようにすることである。

しかし、一気にそのレベルまで持ってゆくことは非常に難しい。

よって、第二に挙げられることは、内容的にはやや社会科からは離れて見えるかもしれないが、日本語理解の一助とすることである。帰国生たちのナマの声を日本語で表現させられてはじめて、社会への適応力や批判力も養えるのである。

また第三に、身近な小社会集団でもある学校社会への適応をつけさせることである。特に「取り出し授業」を展開している受け入れ校では、定時制で半分、全日制ではなんと3分の2もとの時間が帰国生だけで固まってしまう。そこで、一般生徒との協調性を失わないように、「交流」への配慮が必要である。

### (2) 「中国帰国生」に対する社会科教育

「中国帰国生」に対する社会科教育については、特別な学習指導要領の定めも専用の教科用図書も都道府県教育委員会の指導マニュアルもない。さらに、各受け入れ校では、別に中国語ができるわけでもない教員が担当しているのが普通であり、筆者ら（帰国生を担当したのは中郡）も全く中国語など触れたこともない人間であった。

そういう中で各校でもそれぞれ試行錯誤しながら、指導計画を練っているようである。ここでは、何年かの経験をもとに、1992年度に実践された例を紹介する。<sup>5)</sup>

<年間カリキュラム・科目「現代社会」>

#### 1. 自己紹介

・これまでの生活について、口で紹介させる。（この時点では、文章化無理）

#### 2. 日本とその周辺国の把握

- ・白地図を利用し、日本の県名、周辺国の把握をさせる。来日の過程、来日後の変転などを図示させる。(口での説明よりも、むしろ労作教育で)

### 3. 教科書

- ・日本人の食生活、日本の産業構造の特色の項を読み、日本社会の紹介。

### 4. その日（前日）一日の体験発表

- ・日本社会をどうとらえたかをみると共に、日本語能力のブラッシュアップ。

### 5. 新聞記事の教材化

- ・新聞の読み方から身につけさせる。1992年の場合、日中国交正常化20周年の年に当たっていたこともあり、それを中心にして読みと意味を集中的に指導。

### 6. 文化祭への参加

- ・「中国クラブ」による日本語劇、お国自慢料理展示などの文化祭準備に社会科としても協力。(相互協力と相互理解に役立ち、日本語への自信つけさせる)

### 7. その日（前日）一日の体験文章化

- ・前掲4の体験発表の発展。事実を羅列するレベルから、起承転結を構築できるレベルに引き上げることを目的とする。

### 8. 教科書

- ・世界の社会と人類の課題の項を読み、日本社会・世界の中で如何に生きるべきかを、最終的には文章化してゆく訓練。

## 4. 帰国生と一般生徒との交流授業

### (1) 「交流授業」実践のねらい

筆者らは第1学年の1クラスの一般生徒と帰国生徒の同時展開の授業をそれぞれが担当していた（中郡が帰国生徒7名を担当、坂口が残りの一般生徒38名を担当）が、本来「生きた国際理解・異文化理解の場」となっているはずのこのクラスが第3学期に至っても、その機能を果たしていないことに気づいた。

一般生徒と帰国生徒とが完全に別グループ化し、「取り出し授業」の社会科が終わり、「取り出し」でない次の授業の始まる時間のチャイムが鳴っても、なかなかホームクラスに帰国生徒は帰ってこない。さらに観察を続けると、給食時間も帰国生徒だけ別の場所で一緒に食べていることが判明し、つまりは休憩時間に2集団間の相互交流が殆どない実態を発見したのである。

また、たまたま合唱大会の時期にあたっており、その練習風景も見ることができたが、毎日のように行われる練習に、帰国生徒のうち女子5名は一応参加するが、ピッタリとくっつきあって後ろの方にいる。歌詞なども不明な部分もあるだろうし、もちろんリーダーシップをとることはできない。一方、男子帰国生徒2名に至っては練習はおろか、大会本番すらも休むほどという状態であった。

この状態を見た筆者らは、第1に「一般生徒と帰国生徒の間の人間関係を何とか（このクラスの解散する3月末までに）つくりあげること」、第2に「帰国生徒が一般生徒へのコンプレックスを捨て去るため、何か自信をもって自分を出せる機会を作ること」を目標として「交流授業」

を行うことを企画したのである。

## (2) 「交流授業」実践の流れ

### ① “交流授業”の方式決定

近年の国際理解・異文化理解教育のためのプログラムのモデルケースとしては「外国人ゲストに自國文化を語ってもらい、お返しに一般日本人生徒が日本文化を紹介する」というスタイルが一般的になってきているようである。<sup>6)</sup>

しかし、今回の場合は対象が外国人ではなく、親が日本人である上、既に日本に長く滞在し、日常から日本文化に親しんでいることもあり、「帰国生徒に、今までいた中華人民共和国について語ってもらう」という方式をとることとした。

このように、帰国生徒に「先生」役をしてもらうことによって、人前で日本語を話すという機会を作るという効果の他に、いつも一步引きがちな帰国生徒に自信をもって自分を出せる機会を作りたいという効果も狙うこととした。

### ② “交流授業”における使用教材の選定とカリキュラムとの関係

実践校の第1学年の社会科は「現代社会」と銘打たれてはいるが、実質的には「地理」に読みかえた授業が行われており、実践時の第3学期には帰国生徒の授業も一般生徒の授業も「世界地誌」の分野に入っていた。そこで、今回の実践は「アジア学習」の一環としての「中国地誌」と位置づけることにした。

帰国生徒に中国地誌を教授させるにあたっては、本来は中国全体の地誌的事項を総覧してもらうのが最適ではあるが、生徒のこれまで受けた教育では中国全土のことすら取り扱っていない場合も多いということで、生徒の居住していた東北地区（旧・満州）に限って教材化することとした。

具体的な教材としては、偶然にも坂口が中国旅行してきた教え子から土産としてもらった『初中最新教材地理標準化試題及解答』という初等中等教育用問題集を用いることとした。

### ③ “交流授業”前の下準備

一般生徒に関しては授業を受ける立場であるから、これといって特別な下準備は必要ない。敢えて下準備というならば、世界地誌学習を実践時までにきちんとアジアに入るように工夫し、カリキュラム上の整合性を高めておくことが大切である。

一般生徒は「教科書信仰」というものがかなりあって、教科書に掲載されている範囲が終わらないと不安がる傾向があり、今回のような特別なものを扱うにあたっては「教科書に載っていないから軽んじてもよい」という意識をもたせる危険性も考えられるので、授業者の日頃からの工夫が必要である。

一方、帰国生徒については授業者となるのであるから、充分な教材研究が必要である。今回の場合は、中郡が実践前の3時間分の時間を費やして、教材を配布し、中国語を生徒に教えてもらったりながらも内容研究を行い、帰国生徒7名の「やる気」を喚起する努力をおこなった。

帰国生徒は「先生になる」という話を聞いて、はじめは一様に強い拒否反応を示したが、次第に意欲が湧いてきたようである。

#### ④ “交流授業”本番

非常に残念なことに当日、帰国生徒7名のうちの2名（いずれも男子生徒）が欠席した。本番前の授業の折に「オレはやんないよ」と言い放っていたとはいえ、筆者らのショックはあまりに大きいものであった。

従って、“交流授業”的「先生」役は女子生徒5名のみとなった。

“交流授業”時に配布する教材プリントはB4判1.5枚分とした。

実践前の下準備段階の様子から、これでは間が持たずに時間が余るのではないかと懸念されたが、現実には机間巡回をおこなったり、補足説明で話が膨らんで盛り上がりを見せたため、事前の予想とは裏腹にB4判1枚分進むのがやっとであった。（残りは解答・解説プリントB4判1枚を配布し、自習させた）

本来、この実践は「研究授業」として公開するつもりのものであったが、クラス担任・別の社会科担当者等が参観することとなり、「先生」役の帰国生徒は極度に緊張することが懸念されたため、マイク・拡声器を用いて授業させることとした。（当日は偶然にも隣のクラスが体育で、騒音の迷惑をかけずに済んだ）

具体的には、中郡の用意した解答・解説プリントを利用して、帰国生徒が1問ずつ分担して問題を日本語に訳して読み、解答・解説を行うスタイルをとった。

その他補足説明等を適宜、筆者らが付け加えた。特に帰国生徒の日本語のたどたどしいところは、筆者らが復唱するなどの工夫をした。また、帰国生徒自らが補足説明や板書をしたり、仲間が言葉に詰まっているのを見ると助ける場面もあった。しかしこれは前もって用意したものではなく、アドリブで出てきたものだった。

#### ⑤ “交流授業”後の取扱い

この“交流授業”的終了後すぐに、一般生徒・帰国生徒すべてに当日の授業の感想を自由記述法により書かせた。そして、一般生徒にはその後の学年末試験で、中国語による「世界地誌」の問題を出題し、その定着度をみた。

一方、帰国生徒には、一般生徒に書かせた「“交流授業”的感想」をすべて全員で（もちろん、当日欠席した男子生徒2名も）回覧した。

### (3) 「交流授業」実践の内容

【表】 “交流授業”的一例

日時：1991年3月7日（木） 第4校時 授業者：中郡利彦・坂口克彦

指導学級：1年2組 一般生徒38名、帰国生徒7名（当日出席は5名）

指導科目・単元：「現代社会（実質は地理）」，世界の諸地域 アジア地域

	指導内容	学習活動	資料
導入	本日の交流授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当教員2名の自己紹介（中郡、坂口）</li> <li>・本時と前時までの関わり（坂口）</li> <li>・本時で取り扱う中国東北地区の位置確認・残留日本</li> </ul>	帝国書院新詳 高等社会科地

9 分	人孤児発生の歴史的経緯（坂口） ・帰国生徒に「先生」になってもらう旨告知（坂口） ・配布プリントの出典、中国語を読むためのヒント（的=「の」、和=「と」）紹介（中郡）	図帳p. 34補助プリント 2枚
展 開	東北三省の名称・位置確認 ・「先生」に拍手して開始 ・はじめの言葉（帰国生徒A…以下Aと略称） ・東北三省の名称板書（A） ・地図帳による位置確認（坂口） ・中国語の略字に関する注意（中郡）	地図帳p. 33, 34
開 展 開	自然地域 ・プリント1枚目左側の河川名・山脈名作業を指示（A） ・5名の帰国生徒、中郡、坂口が机間巡視 ・机間巡視中に5名の「先生」が解答の板書を開始 ・河川①～③の解答発表（B） （Aが補助的に板書） ・河川④～⑥の解答発表（C） ・山脈⑦～⑨の解答発表（D） ・まとめ（A）	地図帳p. 34, 40
42 分	東北三省の地誌 ・プリント1枚目右側の空所補充問題に入ることを宣言（A） ・1～3番の問題・解答発表（E） （Aが補助的に板書） ・「北西=南東方向」、「北東=南西方向」の補足説明（坂口） ・4番の問題・解答発表（B） ・分水嶺の板書及び解説（Bうまく出来ず、A助ける更に坂口が補説） ・5番の問題・解答発表（A） ・6番の問題・解答発表（C） ・落葉松についての補足説明（坂口） ・テンについての補足説明（中郡、坂口） ・鹿のツノに関する補足説明（C, A） ・薬用人参に関する補説（A, 中郡、坂口） ・7番の問題・解答発表（D） ・「玉米=とうもろこし」の漢字説明（中郡） <ここでチャイム鳴るも、坂口が続行させる> ・8番の問題・解答発表（E）	地図帳p. 34で日本との位置関係確認

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「苹果=りんご」の漢字説明（中郡）</li> <li>・「高梁=こうりゃん」が最近、映画教室でみた「赤いコーリャン」と同じものであることを解説（坂口）</li> <li>・遼東半島の補足説明（坂口）</li> </ul>	
終 結 3 分	本時のねらいの再確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・終了のあいさつ（A）</li> <li>・まとめ、本時の狙いを再確認（中郡）</li> <li>・「5人の先生」へ拍手</li> <li>・本時の授業アンケートのお願い（坂口）</li> </ul>	解答プリント・ アンケート用紙 配布

#### (4) 「交流授業」実践の意義とその効果

たった1回の、この「交流授業」の実践が生徒の意識にどれくらいの影響を与えたかを、正確に把握することは難しい。

とくに、実践当日に帰国生徒2名が欠席してしまうという事態は深刻であり、筆者らの指導が及ぼなかかった結果として深く反省せねばならない点である。

但し、この“交流授業”直後の授業で一般生徒の書いてくれた感想文を見ながら帰国生徒たちが興奮しながら回顧しているとき、欠席した2名も真剣な眼差しで感想文に目を通し、「1つだけ残念だったことがあります。2人の男の子のことです。今日の授業には絶対にいてもらいたかったです。」との感想を見ると、思わずうなだれ、「楽しかったよ。キミたちも出れば良かったのに。」と言うと、小さい声で「うん。」と答え、その日の授業は珍しくノートを真剣にとり（いつもはやる気なく、ボーッとしていることが多いのだが）、まじめに授業を受けた。

一方、一般生徒の方は聞くだけの立場で、本来の「交流」という意味とは異なる授業だったのだが、学年末試験で中国語だらけの「世界地誌」問題を出題したところ、試験全体の平均正答率56.5%に対し、中国語による問題の正答率は60.6%という好成績を示した。また、同じく学年末試験において「（ ）と日本」という題で、任意の国を選ぶ自由作文でも、同時期に試験を実施した他校の例と比べて<実践校22.2%，他校 2.2%>という、中国の選択率が格段に高い状況を示した。

#### [注]

1)例外的に新堀毅（東京都立国際高等学校、1991年）の「都立国際高校における社会科の取り組み」（東京都社会科教育研究会1991年10月例会発表）がある。

ここでは「帰国子女」に対する研究発表やディベート等を取り入れた興味深い社会科教育の実践例が紹介されてはいるが、この都立国際高校では中国からの「引揚子女」は受け入れていない。

本格的に「引揚子女」を扱った研究としては、林聰（東京都立上野高等学校、1993年）のもの（第29回東京都定通教育指導体験発表会）がある。

これは定時制課程における、正式引揚以前の「中国帰国生」や外国籍生徒を含む受け入れの

実態と社会科教育の詳細について触れたものである。

- 2)林聰(1993): 本校生徒の「現代社会」の授業を担当して、第29回東京都定通教育指導体験発表会発表要旨, 5.
- 3)前掲2), 5. によれば、はじめは中国語のできる全日制教諭を講師として迎えたが、その後都立上野高校の元「中国帰国生」の卒業生で社会科教員免許を取得した方を講師とし、授業ばかりでなく生徒にとっての「良き先輩」として相談相手にもなってもらえるような環境整備などもおこなったという。
- 4)帰国生徒は「中国語に長けている」というメリットを持っているはずであるが、東北地区出身者が殆どであるため、「東北方言」が駆使できても大学受験では「北京語」が出題され、このままでは全く有利にならない。したがって第3学年で「中国語」という講座を置き、北京語を2単位で教えている。
- 5)前掲2), 6~7.
- 6)伊藤純郎(1989): 異文化理解のための総合学習. 筑波社会科研究, 8, 65~73. のほか、谷島昭（東京都立第一商業高等学校、1988年）の「日本の伝統文化を学ぶ」（社会科教育全国協議会昭和63年度第42回総会・研究大会第2分科会発表）などが見られる。